
アウローラ：プログラム

終夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウローラ：プログラム

【Nコード】

N0878Y

【作者名】

終夜

【あらすじ】

かつて地球と呼ばれた《ロストプラネット》。人々は地球から太陽が消え、生き延びるために宇宙に新たな人工の星、《プラネット》を作り、住む事となった。あれから数十年。除外された《プラネット》の零で何かが起こる。

プロローグ：00（前書き）

基本的に残酷な表現は無いはずなのですが、たまに表現される事があります。

ブログ：00

《ロストプラネット》

かつて人類が地球と呼んだ星の事を、

今は人々はそう呼んでいる。

かつて人類が《地球》に住んでいた頃、太陽の光が消えるという異常現象が起きた。太陽が無ければ、作物さえ、生物さえ生きて行く事ができない。

生き残るため、人類が選択した答えは宇宙に新しく人工の星を作り、生き残る事だった。

それは、全てで零を除外し、1から10まで存在する、《プラネット》と呼ばれることになる。
そして、現在。

「・・・ツハツ・・・」

息を上げながら、下水道を走る。

下水道の中に浸された下水が走るたびにボロボロになったズボンが濡れるがしょうがない。

追いつかれたら、つかまるのは確実だ。早く、せめてこの下水道から逃げ出さなければ。

「グッ・・・」

先ほど、逃走している最中に《あいつ等》に肩を銃で撃たれ、肩からは出血をしていた。

「（光・・・。外に出られる・・・ッ!）」

光に向かって、更に勢い良く走り出した。外に出た。太陽の光が眩しく世界を照らしていた。今まで、こんな世界が存在するなんて知らなかった。

空は青く広がり、鳥こそ居ないが、こんな青い空は初めてだ。

「止まれッ!」

「誰が止まるかよ・・・!」

俺は空を見上げて武者震いをする。新しく見ることの出来る、この世界を見て、興奮しているのが自分でも判った。

そして、この《プラネット・零》の中枢部となる《ムネーモシユネー》・・・。このプラネット全てのエネルギーを司るタワーを見上げた。

「待ってるよ・・・!」

俺は空に向かって、いや、あの忌々しいタワーに向かって歓喜の笑い声を上げた。

「・・・?」

何か、何だか判らないが《予感》を感じて僕は窓の外を見た。
誰かいたような《気配》がしたのだけど、この隔離された部屋に限って、そんな事は在り得ないと判断して再び机の上に置かれたパソコンに向かい合った。

第1話 「銀色の髪のアリス」

『《プロトタイプ？00》が逃走した。本日より警備プログラムを強化する。育成プログラム生共に住民の外出、及びコミュニケーションを禁じる』

そんな風にテレビが報道していたその日の午後だった。

今日は天気プログラムが晴れの為、夜の7時には空には月と黒く淀んだ《ロストプラネット》と他の《プラネット》が良く見えた。

ガチャンッ

「・・・？」

何かが割れた音を聞いて不信に思い、僕は物音がした寝室へと向かう。

「・・・！」

チャキッ

「・・・動くな」

冷たい声と共に首筋に当てられたのは銀色に光るナイフだった。

眼だけを後ろに集中させる。 少年の容姿が大体把握する事ができた。

銀色の髪に、銀色の瞳の少年。僕と同年くらいだろうか。背は僕よりも少し高めだった。

けれどもその少年の容姿に見覚えがあつて、僕は首をかしげ、思いついた言葉を思わず口に出してしまった。

僕の命は彼に握られているというのに。

危険な一言を、僕は言葉にして呟いてしまった。

「《プロトタイプ？00》・・・？」

口にして、彼のナイフが僕の首を傷つけると思ったが、待っても一向にそれは来なかった。

「・・・僕のこと、殺さないのか・・・？」

「あ？殺して欲しいのか？」

「いや、そういう意味じゃないけど・・・」

「テレビで俺の事、見たんだろ？テレビで既に報じてるのなら他の奴も見てるだろうが。俺は何人殺すことになるんだよ」

そう言うてはいるけど、一向に僕の首からナイフを外そうとはしなかった。

僕が、管理局・・・または《ポリス》に連絡する可能性を前提にしているからだろう。

「っ……」

銀髪の少年が顔を歪めた。少年の肩を見ると、そこから出血していた。

「怪我……してるのか？」

その返答に、痛さのあまり喋らずに僕の顔をにらみつけた。

「……手当てしてやるよ。だからナイフを離してくれ」

「……」

ナイフを僕の首から静かに引き、痛さに顔を歪めた銀髪の少年をベッドの上に座らせた。

救急箱を取ってきて、（普段は、というか今まで隔離された部屋で育って来たため使った事がない薬品等が見受けられた為に）使用方法が判らないことに気が付いた。

するとそれに気が付いたのか、銀髪の少年が救急箱を取り上げてその中から布と消毒薬と書かれた小瓶と綿を取り出した。

「……判るの？ 使用方法……」

「当たり前だ」

自分で治療したあと、銀髪の少年は僕の方を振り向いた。

「……お前、何で俺を治療するなんて言っただ？俺は指名手配犯だ。普通、《ポリス》に通報するのが当たり前前の行為だと思うんだけど」

「人を助けるのに理由が要るの？」

そんな事をマジメに言うと、銀髪の少年は唐突に笑い出した。

「俺の事を人間と呼んだのはお前が始めてだ。ハハハッ・・・傑作だな」

「何が・・・」

チャキツ

再び僕の首へナイフが当てられた。

「《プロトタイプ》・・・お前ら《プラネット》の人間達は、俺達ロストプラネットに住んでいた人間をそう呼んだ拳句に人間としての価値を奪った。・・・お前はその仲間なんだよ。傑作だろ？お前はその事実を知らずに育って、お前は平気で俺の事を人間と呼んだんだ」

9

顔を急に近づけて、銀髪の少年は今度は声を低くして言った。

「傑作以外に何がある？」

「・・・僕は」

「あ？」

「お前の本当の名前が知りたい」

「は？・・・今の流れでなんでそんな風に思うんだよ」

「《プロトタイプ》なんて名前じゃなくて本当の名前があるだろう？お前にも人間としての名前が」

「・・・だから何で「教えて」・・・」

ハアアツ・・・と、銀髪の少年が溜息を吐き、諦めたように僕の名を見た。

「教えたら・・・どうすんだよ」

「僕も名前を名乗る」

「・・・で？」

「え？ええつと・・・。うん、友達に、なる」

「・・・は？」

「だから、友達になるんだよ。僕がお前と」

また銀髪の少年が笑い出した。

どうやら喜怒哀楽は激しい方らしい、と僕はそんな事を考えていた。

「俺が？お前と？」

「そうだよ」

「へえ・・・それは面白いな。いいぜ。俺の名前、教えてやるよ。」

俺の本当の、人間としての名前は、亜^{ありす}璃守だ」

僕も、彼に名前を教える。

「僕の名前は琥珀^{こはく}。宜しく、

アリス」

「・・・お前、俺を匿^{かく}つてていいのか？」

「見つかった時は見つかった時だよ」

「・・・お前、やっぱり変な奴だな」

「怪我はもう、大丈夫なの？」

「ああ、これくらいなら数分もあれば直ぐに完治した」

そういつて包帯をスルスルと取った。

「・・・治つてる・・・？」

「当たり前だ、これくらいの傷」

そういつて包帯をスルスルと取つて、僕に肌を見せた。傷口は完全に塞がっている。

「けど、治癒が遅くなってきたな・・・」

「・・・なあ、何でお前は逃げ出したんだ・・・？」

「・・・俺は《プラネット・零》が嫌いだ。そして、あのタワーもな」

「・・・ムネーモシュネーの事か？」

「ああ。あのタワーさえなければ縛られる事は無い。もう、誰にも縛られる事は無いんだ。あんなタワーがあるからあいつ等はいきがるんだよ。俺はタワーを壊す為にあの牢獄から脱走した」

「・・・俺は、良く、そういうの判らないな」

「あ？」

「俺達は生まれてから、ずっとこういうところで育ってきた。だから

ら、縛られてるとか、そんな事考えもしなかった。アリス、お前が羨ましいよ」

「羨ましい？」

「そついう、色んな事考えられるから」

するとアリスは表情を歪めて僕の顔を見た。

「・・・もういい、寝る」

「な、何か気を悪くした？」

「・・・別に、疲れたから寝る」

それ以降、アリスは寝入ってしまったのか、何も喋らなかった。

「『プロトタイプ？00』が脱走した。追跡可能か、スカアハ」
預言者
『・・・検索中だ』

少年の姿を模した人工AIが、口を開く。

この少年型の人工AIは、二つ目に作られたAIだ。

人工AIは全てで幾つ存在するか把握する事が未だ出来ていない。

認知しているだけでも人工AIの数は100体以上だ。

そしてこれらの人工AIを作成した科学者の名前は確か・・・アル
ス・ハグバーンと言ったはずだ。

既に亡き者として処理されているはずだ。

「
・
・
・
」

「
・
・
発見した。場所は、
《プラネット・零》だ」

第1話 「銀色の髪のアリス」(後書き)

短くて本当スイマセン。

次からはできるだけ長くしようと努力します

第2話 「外界とアリス」

「おはよう、アリス」

「・・・・・・・・」

無言のまま、頭をさすって起き上がったアリスに朝食を渡して、僕もパンを口に運ぶ。

するとアリスは寝ぼけ眼のまま、テレビに視線を移した。

「・・・・革命軍か」

「アリス、知り合いが居るの？」

「まあな。昔の知り合いだけだな」

今度は首の辺りを触っているアリスが取り出したのは、チップの様な物だった。

「何、それ？」

「チップIDだ。これがあると、居場所がばれるからな。昨日の夜からずっと、外しかかっていた」

そのチップを握り締め、バラバラにした後、窓を開けてその残害を捨てた。

「これで時間は稼げるだろ」

「・・・・あ、僕、もう強化プログラムの開始時間だ」

「・・・・強化プログラム？」

「アリス、知らないの？」

「何だ、それは？」

「ええつと・・・勉強の一種だよ。判る？」

「それくらい俺でも判る。強化プログラムっていうのは、こういう隔離された状態で勉強に営むことか？」

「まあね。僕の場合は何年もやってるよ。・・・数十年くらいやってるかな」

アリスがまた、昨日のように何故か顔を歪めた。

「・・・傑作だな」

「え？」

「あ？だってそうだろうが。・・・まるでお前も、ここに居る連中も、外に出ることを諦めてるみてえだ」

外、か。今まで考えた事がなかった。

アリスは僕が持ってきたコーヒーをすすっていた。

「・・・外つて、考えたことも無かったな・・・」

「・・・見るか？」

「え・・・」

アリスはテラスまで来ると俺に手を差し伸べた。

テラスのガラス窓をバツと開けて、俺に笑いかける。その微笑は、きつと男の俺でも美人だともう一度認識させられた。

「外、出してみるか？琥珀」

その指し伸ばされた手を、俺は握り締めた。

「じゃあ、行くぞ」

「・・・どうやって？」

「んなの当たり前だろ」

「飛び降りるのッ！？」

「行くぜ」

「う、あっ！？」

アリスが俺を背中に担いだ瞬間、アリスと俺の身体は重力に従って落ちていった。

「なさけねえな」

「・・・ッだって・・・ッ俺、あんなっ・・・心臓、止まるかと・・・ッ」

俺は息を上げながらアリスを見上げた。
そして俺は驚く。

「・・・ここが外なのか・・・？」
「ようこそ。外界へ。琥珀」

アリスは俺に微笑んだ。
頭上を見上げると青い世界が広がり、図鑑で見た花という植物が地面に綺麗に咲いていた。

「・・・凄い・・・」
「ICチップ、外して置けよ。ばれたら捕まるからな」

言われてICチップ、首輪型の携帯個人IDを外してポケットの中へ忍ばせた。
するとアリスはスタスタと歩いていく。

「アリス、どこに行くの？」
「とりあえずブラブラするか。それとも、革命軍に会いに行くか？」
「革命軍・・・？」

「・・・お前、本当何も知らないんだな」

溜息を吐くアリスに、俺は首をかしげた。

普段あまり気にしたことのない、革命軍という組織にがどんな物なのか、興味が湧いた。

「俺みたいなやつらだよ。この《プラネット・零》を革命しようとするやつらだ。俺も何度か誘われたことはあるが俺は入らない」

「何で？入ればいいんじゃないの？」

「俺はムネー記憶の女神モシユネーを壊せばそれだけで十分だ」

「・・・」

苦しい表情を見せたアリスに、俺は無言でアリスの横顔を見ていた。

「アリスじゃねえか！」

「え？」

赤髪をした男の人が、アリスに近付いてきた。

後ろを見るとアリスは一步步後ろへ下がっていつている。

「お前生きてたのか！良かったよかった！」

「勝手に殺すな！」

「ん？で、コイツ、誰だ？お前の彼女？」

俺は咳き込んで、アリスは男の人の頭を殴った。
アリスが大声で叫ぶ。

「バツカヤロウが！コイツ男だぞ！？」

「ありや、そーだったのか？あまりにも女顔だったから・・・」
「死ね！」

「・・・あ、アリス。えっと、この人、」

「ああ、俺は《革命軍》の1人、レインだ。よろしくな。アリスの彼女さん！」

「だからちげえつつってんだろーが！」

「・・・ええっと、俺は琥珀です。よろしく願いします・・・」

《革命軍》の人って、個性的な人が多いんだろうか・・・。

俺はそう思いながらアリスの会話を聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0878y/>

アウローラ：プログラム

2011年11月5日10時15分発行